平成二十年度秋季大会研究発表要旨

吉屋信子「良人の貞操」論

博士後期課程三年　竹田志保

吉屋信子の代表作の一つである「良人の貞操」（『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』一九三六年一〇月六日～一九三七年四月一五日まで連載）は、連載時から大きな反響を呼び、映画や舞台などにおいても社会現象的な人気を博した小説である。信也と邦子の夫婦、そして邦子の親友である加代の三角関係の物語であり、信也と加代が関係したことで、三者は友情と愛情の間で葛藤するが、最終的には邦子の取り計らいによって、二人の過ちは許され、邦子夫婦の関係も修復されるという結末となる。小説に登場する「結婚」をめぐる問題や、「良妻賢母」的とされる解決は、周辺の同時代言説と連動しながら、多くの人々の関心を集める要因となったが、しかしそうした要素は広く流通するほどに、小説テクスト自体を離れ、類型的に読まれてしまう事態を引き起こしてしまっていたのではないか。

登場人物たちに対しては、常に何らかの類型化、カテゴライズがつきまとっている。しかしそこには必ずしも支配的言説には回収することのできないきしみがある。たとえば、加代という女性は、男性からの「芸者」のようであるというイメージと「女学校卒」の真面目な女性であるという邦子による位置づけの間で揺れ動き、しかしそのいずれにも安定できない女性である。

一方では、邦子のように「妻」「母」といった自らに期待される像を受け入れ、主体的にそれを目指していく女性が描かれるが、その実現までには、妊娠のプレッシャーと、出産への恐怖が刻まれている。それでも加代の出産に同一化するようにして「母」になろうとする邦子には、自然・自明なものとしての「母」との距離があらわされている。さらに「母」になることによって、良人をも精神的に向上させるとしながらも、一方では良人から金銭や、性行為の主導権を奪うことで、邦子は男性の領域を侵害する。邦子は「良妻賢母」を実現しながら、同時に「良妻賢母」を自壊させてしまっているのである。

こうしたきしみは、吉屋の意図したメッセージではなかったであろうし、当時の読者に読みとられた可能性も少ないだろう。邦子は自他共に認める「良妻賢母」として自己実現を果たし、そこに回収不能になった加代は、最終的には再婚と、「外国」に放逐されることでその過剰さを解消されている。

しかしたとえばこの邦子の「母」による解決という飛躍、その明らかな無理を通して自身を納得させていく過程には、むしろそうした理想像に応じることの困難の方こそが刻まれ、しかしそれを露呈させることなく隠蔽していく過程が描かれているのではないか。ここには女性をめぐる様々な視線や要求、規範への亀裂となりうるものがある。

吉屋信子の大衆小説は、時代性を強く刻んでいるがゆえに、同時代において支持され、また時代の変化とともに忘れられてしまっているが、今日改めて読んでみると、同時代には気がつかれなかった様々な問題や、また同時代の評価とは違うかたちでの評価の可能性がある。更に検討していく価値のある作家であるだろう。